ドイツの大学の授業評価
—— カッセル大学 2015/16 年冬学期の場合

西　口　拓　子

2015/16 年の冬学期にドイツのカッセル大学ドイツ語学文学科で，一般の授業を担当する機会に恵まれた。使用言語はドイツ語で，イタリアや中国からの留学生数名を除けば，みなドイツ人の学生だった。偶然にも授業評価が実施されるセメスターだったため，これにも参加することになった。日本とは多少異なるため，ここに記録としてまとめてみたい。

現在ドイツの大学の Professor は，俸給体系では W1, W2, W3 の 3 種類に分けられ，私は一般の W2 の先生と同じ待遇で半年間滞在することになった。[1] 待遇が同じということは，授業は 3 コマを担当する義務があるということである。大人数を相手とする講義形式の授業の担当は困難に思われたため，全てゼミナール形式とし，履修者に 30 名という上限を設けてもらった。さらには，有能な TA (Hilfskraft) もつけてもらえたため，なんとか 3 コマのゼミナール担当を乗り切ることができた。[2]

2015/16 年の冬学期は，2015 年 10 月 12 日から 2016 年 2 月 12 日まで。最

---

[1] W1 は Juniorprofessor (任期付き) である。W3 の教授になると，他大学からヘッドハンティングの申し出があるたびに, 給料が上がると聞いた。ある先生の大学のホームページの履歴欄に，何年度にどの大学から招聘され，それを断ったということがリストになっているのはこれと関係があるだろう。

[2] 担当したのは以下の 3 コマである。(Ger. 104) Internationale Rezeption der *Kinder- und Hausmärchen* der Brüder Grimm, (Ger. 105) Einführung in die Märchenforschung, (Ger. 106) Internationalisierung des Projektes „Grimm-Orte in Kassel“.　ここでは Hilfskraft を TA と呼ぶが，主に授業準備の際にドイツ語の文法チェックを頼んでいた。プリント印刷なども手伝ってもらうことができる。

初の月曜日から水曜日までは，オリエンテーションにあてられ，授業開始は木曜日で, 10 月 15 日だった。授業準備の時間が十分にとれるように, 私は月，水，金に 1 コマずつ担当したため，16 日 (金) が初めての授業日となった。

授業が始まってまもなく，全教員にメールが送られてきた。今学期は，３学期に一度の授業評価を実施すると書かれていた。ドイツでも，現在は授業評価が行われている。添付されてきたエクセルファイルには，担当教員名と科目名が書かれており，各自が履修者数を記入することになっていた。拒否する理由もないため，履修者数 (必要枚数) を記入して返信した。

実施時期・方法

2015 年 11 月 30 日から 12 月 11 日の間に実施された。一学期には約 15 回の授業日があるので，その 7 ～ 8 回目にあたる。実施時期は日本と比べて非常に早い。

12 月 7 日には，全員にリマインダーのメールが届いた。授業評価の実施期間は 12 月 11 日までであることと，結果は 1 月中旬までには送付すると書かれていた。結果を学生と話し合い，残りの授業に役立ててほしいというのである。

データの処理は，業者に委託するのではなく，学内の INCHER (International Centre for Higher Education Research Kassel) が担当している。質問事項は, A4 の用紙に両面印刷されていた。用紙は, 実施期間の直前にメールボックスに届けられた。

実施方法は，日本とほぼ同様である。授業の最後に時間をとり，学生は無記名で回答した後に各自で用紙を封筒に入れ，あらかじめ頼んでおいた一人の学生がそれを指定の場所まで持って行くという手順であった。

授業評価シート

ここで，質問事項を紹介する。

1. あなたについて／この授業の履修について，回答してください。

・性別　☐ 女　☐ 男　☐ 無回答

・取得している資格について ☐ 専門 (単科) 大学向けアビトゥーア　☐ アビトゥーア (大学入学資格試験)　☐ 職業教育　☐ 大学

・あなたは何セメスターに在学中ですか ☐ 1　☐ 2　☐ 3　☐ 4　☐ 5　☐ 6　☐ 7　☐ 7 以上

・あなたはどの課程に在学していますか ☐ 教職課程 1 (小学校，4 年生まで)　☐ 教職課程 2 (基幹学校・実科学校，5 年生～)　☐ 教職課程 3 (ギムナジウム，5 年生～)　☐教職課程 4 (職業学校等)　☐ バッチェラー　☐ マスター

・これまでの授業への出席　☐ およそ三分の一　☐ およそ半分　☐ ほぼ毎回

・この授業のための週の勉強時間　☐ 0 ～ 30 分　☐ 30 分～ 1 時間　☐ 1 ～ 2 時間　☐ 2 時間以上

・この授業に必要な労力は私には　☐ 少なすぎる　☐ ちょうどよい　☐ 多すぎる

・この授業を履修した理由（複数回答可）

☐ このモジュールが必要だったから

☐ このテーマに興味を持ったから

☐ この授業が卒業試験の準備となるから

☐ ここで学ぶ内容が将来の仕事で重要となるから

☐ 教員

☐ 時間 (授業の日時)

2. この授業がどの程度次の内容に当てはまるか，選んでください。

（1 ～ 5 まで。1 とても当てはまる←→ 5 全く当てはまらない。問 13 には,「意味のある回答は不可能である」，の欄が設けられている。[3]）

1. 履修している学生たちは，この授業が成功することに貢献している。
2. 学生たちは，頻繁に質問をしている。

---

[3] チュートリアルがない授業もあるため。

3. この授業は，授業外でも内容を考えさせるものである。
4. 私は必要な文献を読んでいる。
5. 私はそれ以外の文献も読んでいる。または，教員が授業内で言及した観点 (ものの見方)　について考察・研究している。
6. 私は質問をしたり，ディスカッションに加わったりして，授業に参加している。
7. この授業は，専門知識の獲得に貢献している。
8. 私はこの授業についていくことができる。
9. この授業では，扱う内容の可能性と限界について，批判的な議論が可能である。
10. この授業は，専門的な問題に気づかせ，どのように対処するかの手助けとなる。
11. この授業のテンポに私はうまくついていくことができる。
12. 視覚化や資料が，私の学習を助けてくれる。(視聴覚資料や配布資料が適切である。)
13. チュートリアル（チューター指導）が，この授業を有意義に補っている。
14. 授業の内容は，理解できるように伝達される。
15. 教員は，学生の質問や提案を受け入れる。
16. 教員は準備をしてきている。
17. 教員は，以下の点で授業をうまくコントロールしている。
    17.1 時間（セメスター全体）
    17.2 時間（毎回の授業）
    17.3 内容（分かりやすい筋道）
    17.4 コミュニケーション（プレゼンテーションの司会）
18. 教員は学生の共同作業にとって重要である。
19. 教員は学生に敬意を持って接している。
20. 教員は学生の学習の成功にとって重要である。
21. 教員はその科目への熱意を示している。

3. この授業に当てはまるものはどれですか (複数回答可)

☐ 学際的　☐ 協同学習　☐ 最新の研究　☐ 理論と実践の融合

☐ 基礎の教授　☐ 学術的な論文 (研究) の方法論の指導

自由記述欄

この授業で特に気に入った点はどこですか。あなたの考えで，より良くするにはどんな点がありますか。

（以上が評価シートの内容である。）

結果

1 月 22 日に，結果がメールで届けられた。3 種類のファイルが添付されていた。一つは，PDF ファイルで，回答の分布状況を示したグラフと個人の平均値だけでなく，学科の平均値も併記されている。もう一つのワードファイルには，性別など様々な観点から分析した数値が示されている。さらには，自由記述欄のみをスキャンしたものが PDF ファイルとして送られてきた。1 月 26 日には，追加資料としてワードファイルがメールに添付されて送られてきた。これには，学生の回答を出席状況別に分析した数値が示されていた。片方は出席が 3 分の 1 から 2 のグループ，もう一方はほぼ全回出席のグループで，両グループの回答の結果を併記したものである。

結果は，日本でのように公開 (学内のみの限定公開を含む) されることもなく，担当教員のみにメールで送付された。結果については，授業内で学生と話し合い，残りの授業を改善してほしい，また授業外で学科長とも対話をしてほしいとメールに書かれていた。[4]

---

[4] 日本では，結果について学生と直接話し合いを行うのではなく，フィードバックと称したコメントを教員が書くケースがある。大学によっては，アンケートの結果や学生の自由記述を踏まえた教員側の対応を次年度のシラバスに載せている。

感想

以上が授業評価アンケート実施についての報告である。以下では，専門的な見地からの考察ではなく，あくまでも個人的な感想を述べてみたい。

最も気になったのは実施時期の早さであった。前述の通り 7 ～ 8 回目の授業で調査されたのである。TA の学生によれば，前回は学期末に実施し，（学生ではなく）先生自身が用紙を回収したと記憶しているとのことであった。授業評価シートの「17. 教員は，以下の点で授業をうまくコントロールしている」の問い「17.1　時間（セメスター全体）」は，学期全体での時間配分を問うものであるから，学期末にして初めて意義がある。さらに，授業への出席状況が「3 分の 1」か「半分」か，という問いも，この時期にはほとんど意味がないように感じた。アンケートに関しては試行錯誤の段階のようだ。

私の授業に関しては，各ゼミナールの初めの２回は授業の説明に使ってしまったため，特に始まったばかりという印象が強かった。導入の説明に十分な時間を割いたのは，学生たちには授業内容（進め方）を良く理解した上で参加してほしかったからである。ドイツでは出席は取らないことは承知していたが，時たま出席してくる学生を相手に授業をする余裕はなく，「この授業は出席してもらうことを前提に構成している」ということを最初に伝えたかったのである。出席を要求するということは，こちらもそれなりの授業を準備する覚悟の上であった。

結果に関しては，私の数値は，ドイツ語学文学科の平均値あたりで，3 つの授業ともほぼ同様の結果であった。これは，実施時期が早かったためだと考えられる。学期末であれば，授業毎に多少の差が生じたはずである。学期末に聞いた学生からの率直な意見も，私の自己分析とほぼ一致していた。

一番好評だったのは，金曜日の「昔話 (Märchen) 概論」だった。これは，私の日本の恩師の研究成果を半年間で学ぶことが出来る授業で，内容的には非常に充実しており不安はなかったが，Märchen というと，内容が簡単だと思う学生も多数履修する恐れがあった。これは日独で変わりがないことを，

カッセル大学の先生との事前の打ち合わせで聞いていた。楽に単位が取得できると考える学生が多数履修すると，グループワークに支障をきたすと考え，意図的に金曜の午後に設置し，本当に興味のある学生のみが履修するようにした。おかげで私の週末は短くなったが，それだけの効果はあった。この授業の最終日に，学生たちは寄せ書き（ドイツ語だけでなく日本語でも）と花束とチョコレートを用意してくれていたのである。授業準備に非常に時間がかかったので感激はひとしおだった。金曜日の授業の参加者は，3 つの授業のうちで最も少なく, 15 名程度だったが, うち 10 名がほぼ毎回出席で, 2 名は, 単位等が一切不要であった。ドイツでは出席は義務ではないために，これは大変に嬉しいことだった。（むろん，私が出席するように強要していたこともある。）

水曜日の授業では，最初の数回は私が講義をし，日本でのグリム童話受容に関しての話をしたため，構成などもうまくいったように思う。その後，学生のプレゼンテーションが中心となった授業では，履修者が 30 名を超えたために，一回あたりの発表者が多くなってしまい，プレゼンテーションのさばき方には，もっと工夫が必要であると感じた。これはドイツでの経験値が圧倒的に少ないために仕方がないともいえるが，この辺りは，アンケート調査が学期末であれば，数値にも反映されたのではないかと思う。

アンケートの結果は，前述の通り公開されていないため，ここでは詳しい数値には言及しないが，ひとつ，学科の平均より悪い「3」となっていて気になるものがあった。「2. 学生たちは，頻繁に質問をしている」である。どの授業でも，学生はよく手を挙げて発言してくれていたため，この数値の意味を考えさせられた。そこで，私の授業の構成が，日本の学生向けになっていることに気づいた。本務校の学生がおとなしいため，専らこちらが質問を出す形になっているのである。日本では，それでも（特に履修者が多い講義では）皆の前で答えるのを躊躇し，誰も返答しない可能性もあるが，ドイツではそうした心配は不要であった。おそらく教員は，明確な問いをこちらから投げかける必要はなく，そのきっかけさえ与えれば，学生たちが自主的に

質問をしてくるのだろう。そうした授業スタイルの違いは非常に興味深く感じた。私のように，こちらが質問を用意する形でも，誰も手を挙げないなどということは一度も起きず，授業としては非常にやりやすい。準備は想像以上に大変であったが，授業が始まってしまえば，学生が積極的に参加してくれるため，進行は日本よりはるかに楽に感じた。

授業評価アンケートの実施時期の早さに関連して，授業も終盤となった1月末に気になる発言があった。水曜日の授業で，最後から2番目の発表を担当したグループの男子学生が，冒頭で「セメスターの終わりだというのに，こんなにたくさん来てくれてありがとう」と言ったのである。日本ならば，授業の開始直後と，最後の頃が出席率が高いと思う。ドイツと日本の学生の出席動向に違いがあることにようやく気づかされた。

思い返せば，さらに思い当たる節はあった。水曜日の授業では，プレゼンテーション（発表，グループも可）で成績を出すことにしていた。一番目の発表をした女子学生が，すぐに点数を知りたがり，その後の授業の時にも何度も問い合わせてきたのである。点数は学期末に一括して出すものだという先入観に捉われていた私は，なぜこのような質問をするのかといぶかしく思いつつも，「念のため他の先生に相談して，学期末に出す」と逃げていた。学生たちの話によれば，プレゼンテーションをした日に講評とともに点数を教える先生も少なくないそうである。成績は，パソコンから随時入力可能である（ただし私のゲストアカウントからは，システムにアクセスできなかった）。出席（授業への参加度）を評価に反映しないのであれば，学期末まで待たずにプレゼンテーションの直後に入力できるわけである。出席が評価されないということは，減点対象にもならないということだ。学生はオンラインですぐに成績を確認できる。その確認が済むと，二度と授業に現れないという露骨な態度をとる学生もいるそうだ。私は，日本式に出席をとるということを最初に何度も伝えていたため，なんとか履修者をくいとめることができたようだ。そのため，こうした学生の動向には全く気づかなかったのであ

る。TA の学生の話では, 履修しているひとつの授業で出席者が激減したため, 途中から出席を取ることに方針が変えられたということだ。

つまるところ，学期末には出席者が減りアンケートの回答数が不足する可能性もあるため，今回の実施時期に変更したのではないかと推測している。これは確認はしていないが，より良い授業を提供するために試行錯誤を続けているのは，日独変わりがない。

ひとつ疑問に思ったのは，3 セメスターに一度だけ実施するのでは，授業評価を実施する時としない時での，先生の熱意に違いは生じないだろうか，ということだった。（つまり授業評価のあるセメスターだけ，熱心に授業をするのではないか，ということ。）そこで，授業評価アンケート実施の案内が届いた直後に，そのことは何も告げずに，TA の学生に聞いてみた。「先生方は，今学期はいつもより親切だったり，丁寧だったり，授業の準備がいつもより万全だったりということはないか？」と。彼女の答えは，特に違いはないと思う，だった。彼女は大学の授業に全般的に満足している修士課程の学生である。先生方にも気に入られており，実力もあるからこそ，私に TA として紹介されたのだろうと推測する。先生方への厳しい視線はなく，彼女の好意的な見方がどこまで信憑性があるかは判定不能だった。学期中は，研究室で学生を熱心に指導する先生方の姿が見えた (たいていの先生はドアを開けはなしているため見えた) が，それが毎回のことなのか，今回だけ特別に熱心なのか，半年間の滞在では，自ら比較することは出来ず，少々残念に思った。

成績評価

授業評価だけでなく，成績の評価に関しても，日本との違いに戸惑ったことがあるため，少し付け加えておく。

日本では,「テストで評価する」「レポートで評価する」など，個々の授業

での成績評価方法は担当教員が決めるのが一般的だと思う。

成績評価に関しては，水曜はプレゼンテーション (口頭発表) ，金曜はレポート, 月曜はプロジェクトごとに作成したテクスト（レポート）で評価する，と最初の授業で伝えた。もちろん履修者全員を同じ課題で評価するつもりであった。授業の準備で手一杯だった私は，成績評価のことまではよく考えていなかったのである。

そのため学期のはじめには，授業後に毎回たくさんの学生に囲まれた。授業内容についての質問ではなく，成績評価について尋ねられたのである。こうした質問から，私の認識が間違っていたことが明確になってきた。要するに，「Teilnahmeschein（参加証）のみ」,「口頭試験」,「筆記試験」,「レポート」のどれにするかは，担当教員が決めるのではなく，学生自身が必要なものを選べるらしい。水曜の授業では，全員がプレゼンテーションをすることを想定して授業を準備していたのだが，参加証だけ必要という学生の履修 (プレゼンテーションをしない) も, 結局は認めざるを得ず, 想定外の展開となった。さらには，一人の卒業間近の女子学生が「筆記試験」の実施を要求してきた。カッセル大学でお世話になった先生は，筆記試験の作成は手間がかかるからやらなくて良い，と言ってくれたのだが，学生のほうでは，どうしてもこの授業で筆記試験を受験したいと主張を続け，事務に何度も掛け合っていた。規定上は，授業を担当するからには，受講者の希望があれば試験を実施しなければならないらしい。彼女の主張は，筋が通っており，結局は私が折れる形となった。しかも筆記試験希望は一人のみである。受験者が一名の場合は，教室に先生と二人きりというのは禁止されている。第三者として，これまた TA の学生に立ち会ってもらった。それにしても, 甘いか厳しいかの前例のない外国人の教員の試験を，卒業間近の大事な単位で希望する大胆さには驚いた。(彼女は，教職課程に在籍しており，ドイツ語学文学と化学を専攻しており，必要な単位はあとわずかだった。) グリム童話は，ドイツの学校の国語の授業[5] でテクストとして使わ

[5] バイエルン州の友人の情報による。2015 年度に 5 年生でグリム童話の「ルンペルシュティルツヒェン」などを読んだという。

れており，「グリム童話の国際的な受容」という授業のテーマが，将来，教員として働く上で役立つと考えてくれたのかもしれない。

そうして一人の学生のためだけに筆記テスト問題を作成したのだが，間違いがあってはならないため，これもあらかじめ TA にチェックしてもらった。問題が漏洩しないように，メールなどでのやりとりはしなかった。テストの実施日は，かなり自由度が高く，私たち三人の都合のよい日に設定した。

ドイツらしく感じたのは，試験 (やレポート) を三回受験 (提出) して不可だった場合には，退学となることである。成績入力をする際の学生のリストには，その学生にとって何回目の受験であるかが書かれている。1/3 とあった場合は，一回目である。私のクラスではほとんどの学生が一回目だったが，一人の学生から，隣の州の大学で三回不可を取り，カッセル大学に移ってきたということを聞いていたため，緊張感を持った。入学試験はないが，適性のない分野を専攻した責任は本人にあるということなのだろうか。ちなみにその学生は，非常に要領が悪いが，授業への参加は非常に熱心で欠席もなく，日本であれば参加度を評価されて，比較的良い成績を修めるのではないかと感じた。[6]

成績評価に関して最も驚いたのは，成績の提出締切が設定されていないことであった。つまり，学生が必要な時までに成績が出そろえば良いのである。日本では，履修者が 10 人の授業であれ，300 人の授業であれ，採点締切日が同一の場合が多いと思う。配慮されたとしてもせいぜい数週間だろう。実際には，履修者数だけでなく，レポートの内容によっては，評価に時間を要するのだから，締切がないのは合理的に感じた。（就職などの関係で，すぐに評価が必要な場合には，先生と個人的に連絡をとるようだ。）

そこでもう一つの謎が解けた。学生が「2 年前の授業のレポートを提出し

6　日本の学費は高いが，かわりにこうした学生へのケアは充実している。近年は「入門ゼミナール」などでレポートの書き方等の指導が受けられる。

て良いか」と聞くことがあり得るのは，締切がないからであった。教員が受け付けてくれれば提出が可能なのだ。

教員側の採点だけでなく，このように学生のレポートの提出に関してもゆるやかであるため，学生は何度も「レポートの提出締切日」を尋ねてきた。当初は，教員によって多少の差はあるにしても，成績締切日から逆算して，提出期限はどの授業でもだいたい似たようなものだろうと思い込んでおり，今決めなくても大丈夫だろうと，先延ばしにしていたのである。

事務の方々に相談したところ，レポートの提出締切は基本的には学期末だということだったため（実際には非常にゆるいが），金曜の授業のレポートは，3 月 31 日を締切日とした。学生たちは締切を守って提出してくれたが，私が帰国後に本務校での業務に忙殺されたため，ドイツのゆるさに甘えて，多くのレポートの点数を出したのはゴールデンウィークになってからだった。

6 月 20 日には，1 名の男子学生から成績問い合わせのメールが来た。そこには「他の履修者にはもう点数が出ているみたいなので，心配になってメールを書いた」と書かれていた。「もしもまだ採点の途中でしたら，点数が今すぐ必要というわけではありません。急ぎません」と書いてあった。次の学期が終わろうという時期なのに急がない，というのはドイツ的に感じた。実際には，彼の点数もゴールデウィークに送っていたのだが，手違いで一人だけ入力されなかったらしい。すぐに事務に連絡し，入力してもらった。

その他，残りの数本のレポート（提出が締切ギリギリだったもの）の採点は，8 月初頭になってしまったが，どこからも苦情は来なかった。

あとは，数年後に「あの時履修した者ですが，レポートを出しても良いでしょうか」といった問い合わせが来ないことを願うのみである。